

8世紀東アジア政治状況の中における万葉集の成立

The Political Situation in 8th century East Asia and
the Formation of the Manyôshû

山口 博*

In the long history of the establishment of the Manyôshû, which extends as far as the early Heian period, there is a text among those definitely ascertained to have been a source for compilation, (i.e. the so-called ur-manyôshû) in which appear headings such as “Hatsuseno Asakurano Amenoshita Shiroshimesu Sumera Mikotono Miyo.”

This ur-manyôshû corresponds to poems 1 through 53 of the first book of the present Manyôshû, beginning with the poem of the Yûryaku Emperor and ending with those of the time of move to the Fujiwaranomiya capital (A.D. 694, Shuchô 8) in the Jitô reign. The text of this ur-manyôshû is thought to date from the Keiun era (704–707) of the reign of the Monmu Emperor.

The foreign relations of the Japanese court had been forced into a defensive posture with the defeat in Korean diplomacy in the 7th century, and during the half century of the reigns of Tenmu and Jitô, no envoys were sent to the Tang Court; instead, the court was preoccupied with consolidating the domestic polity. In the first year of the Taihō era (701), the format for diplomatic documents (shôshoshiki ‘rescript style’) was first defined under the ritsuryô system, and the next year saw a shift towards a more aggressive foreign policy with the dispatch of an envoy to China. Both the

* YAMAGUCHI Hiroshi, 富山大学人文学部教授

Nihonshoki and the Fudoki, reflect, in their accentuation of foreign relations, this change in the political situation. And the same would appear to be the case with the ur-manyôshû, as well.

What does the expression 'Amenoshita Shiroshimesu Sumera Mikoto' signify? The corresponding heading in the Nihonshoki reads "Oohatuseno Wakatakeno Sumera Mikoto," while that in the Kojiki reads "Oohatuse Wakatakeno Mikoto Hatuseno Asakuranomiyani mashimashite Amenoshita shirashi-meshiki." The ur-manyôshû's weighty expression "Amenoshita Shirashimesu" comes from the language of diplomatic documents in the shôshoshiki, the bulk of examples appearing in imperial edicts and memorials to the throne.

Why does this usage first appear with the Yûryaku Emperor? In the written history of relations between China and Japan, Himiko lies hidden beyond the horizon, whereas Waô-Bu is accorded the role of the heroic king. The great king who suppressed the Kudara and contested the authority of Kôkuri and Nansen is Waô-Bu, i.e. Yûryaku. Why is his poem directly followed by one of the Jomei Emperor? It was Jomei who initiated (in 630) the embassies to Tang which formed the basis of Japan's foreign policy in that age.

Detailed accounts of the envoys between China and Japan appear in contemporary Chinese historical records, as well.

Like the opening poem of the Chinese classic Book of Poetry, Yûryaku's poem which begins the ur-manyôshû is a love poem transformed to sing of a heroic king's control over the land. Jomei's poem, in turn, is concerned precisely with administration of the state domain. Indeed, we can say that the compilation of the ur-manyôshû was a literary enterprise in praise of the rituryô state and its system of fiefs, conscious of the proximity of the Tang empire and of Japan's international situation in East Asia. In the second year of Taihō (702), Awata no Mahito, who had played a role in drawing up the Rituryô code, was sent as an envoy to China, and his party included Yamanoue-no-Okura. The ur-manyôshû was compiled shortly after their return from China.

万葉集形成の歴史は、長期間に及び、かなり複雑な過程を経ていると考えられます。ですから、なぜ、どうして万葉集を編んだのかという問に答えることは、容易ではありません。現在の20巻4500首の万葉集から編集意図を考えても、それは最初の企画者の意図からは、かなり遠いものになるでしょう。

万葉集の最初の形態がどのようなであったかを考えることも容易なことではありません。私は最初の形態がどのようなであったかを求めることはやめにして、形成史の比較的初期の成書を示し、その編集意図を考えてみたいと思います。比較的初期のといいましたが、おそらく、それが最初の成書だと思いますが。

その成書を後に標日本と呼ぶことにしますが何天皇の時に作られたかを示す標目があります。たとえば

はつせのあさくらのみやにあめのしたしらしめしすめらみことのみよ
泊瀬 朝倉宮 御宇 天皇 代 (巻1-1)

たけちのをかものみやにあめのしたしらしめしすめらみことのみよ
高市 岡本宮 御宇 天皇 代 (巻1-2~6)

なにはのたかつのみやにあめのしたしらしめしすめらみことのみよ
難波 高津宮 御宇 天皇 代 (巻2-85~90)

などです。その標目をたどって読むと、古い時代から順次に新しい時代に歌を配列し、他の部分とは際立って整然とした統一性がみられます。標目により統括された部分が、一つの成書を為していたことは疑いありません。それを標日本と呼んだわけです。

その標日本は二つの集団から成ります。現万葉巻1（全84首）の1~53までと、巻2（全150首）の冒頭85から202までの部分です。この二つの集団は題詞の表記などに微細な点で異なりがあります。

a 天皇登香具山望国之時御製歌（巻1-2）

天皇賜鏡王女御歌1首 (巻2-91)

b 過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌（巻1-29~31）

弓削皇子薨時置始東人作歌1首并短歌（2-205~6）

1) 歌数を巻1には書かないが、巻2には題詞中に明示する。→上例のa

2) 天皇歌を巻1では「御製歌」と書き、巻2は「御歌」とする。→同a

- 3) 反歌を伴う長歌の題詞は、巻1は「～歌」、巻2は「～歌何首并短歌」と表記する。→同b

これらの巻1と巻2の題詞の異なりは、二つの集団が標日本であっても編者と成立年次を異にすると考えられます。先に巻1のほうの標日本が成り、それに習って巻2のほうができたと思われまふ。今問題にしているのは、巻1のほうです。

標日本の内容は、雄略・舒明・皇極・斉明・天智・天武・持統の約200年間の歌、実質的には舒明以下60年間の歌からなっています。雄略天皇の「そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ」と、国家経営の歌に始まり、持統8年(694)の藤原宮遷都に際しての歌で終る。国見歌あり、行幸歌あり、狩猟歌あり、『詩経』の雅頌に相当する帝王讃歌のアンソロジーです。

この標日本の成立は、最終の歌である藤原宮遷都に関する歌が詠まれてから、さほど遠くない時期でしょう。40番歌～44番歌は持統天皇伊勢行幸の歌ですが、44の題詞には、「石上大臣從駕作歌」とあります。石上麻呂の任大臣は、文武朝の慶雲元年(704)正月ですから、その麻呂を「大臣」と表記する題詞を持つ標日本は、慶雲元年以後の成立でしょう。文武朝の末年(704～707)の成立と考えてよさそうです。そうだとすると、それよりも早く成書の形の万葉集を考えることは無理ではないでしょうか。私は標日本こそ最も古い“万葉集”であったと考えています。標日本という言葉をやめて“”付の“万葉集”という言葉を使うことにしましょう。

“万葉集”のできた文武朝という時代は、国際化の時代でした。ハードウェアとでもいうべき都の藤原京は、中国の都城にならったわが国初の計画都市です。碁盤の目に道を敷いた条坊制都市です。ソフトウェアの法体系は、これも中国模倣の大宝律令を制定。重要なことは、天武、持統の二朝間では中国との国交が断絶していたのですが、文武朝では国交を復活、遣唐使を派遣していることです。大唐の先進文明を摂取して、ようやく文物の儀が備わったと、後の歴史『続日本紀』は書きます。このような国際化の状況の中で、“万葉集”は

生まれます。私には“万葉集”を国内のこととしてのみ、封じ込めておく気にはなれないのです。

さて、“万葉集”は標目に「御宇」という言葉を使用しています。万葉集はこの言葉に無関心すぎたのではないのでしょうか。金石文などによると、「あめのしたしらしめす」は古くは「治天下」と書きました。それが「御宇」という漢語表現に変わったのは、文武朝の大宝年間ごろからです。これは、大宝2年施行の大宝律令の条文で「御宇」を使用したことが影響しているのです。大宝令の公式令詔書式（『令集解』所収の『古記』による推定）は、詔書の5形式を示し、天平年間に書かれた律令の注の『古記』や『令義解』などはその用法の別を説いています。それによると

- a 明神御宇日本天皇詔旨……大事を隣国（唐）及び蕃国（新羅）に宣する詔書形式
- b 明神御宇天皇詔旨……次事を隣国（唐）及び蕃国（新羅）に宣する詔書形式
- c 明神御大八州天皇詔旨……国内に大事（立皇后・立太子）を宣する詔書形式
- d 天皇詔旨……国内に中事（任右大臣以上）を宣する詔書形式
- e 詔旨……国内に小事（授五位以上）を宣する詔書形式

ということです。「御宇」は外交詔書の用語なのです。この a b は、実際に使用されなかったのだという説もありますが、10世紀成立の律令施行細則とでもいべき『延喜式』に、蕃客従海路来朝。摂津国遣迎船。王子来朝遣一国司。

余使郡司。但大唐使者迎船有数。……国使喚通事。通事称唯。国使宣云。日本尔明神登御宇天皇朝廷登。某蕃王能申上随尔参上来留客等参近奴登。……宣。（『延喜式』卷21玄蕃寮）

とあるから、全くの空文ではないでしょう。外交詔書の「あめのしたしらしめす」は「御宇」と表記するのだという新知識に基いて、元来は「治天下」とあ

ったものを「御宇」と書き直して『日本書紀』に入れた例もあります。次の2例がそれです。

明神御宇日本天皇詔旨，天皇所遣之使与高麗神子奉遣之使既往短而将来長云云。(大化元年高麗使への詔)

明神御宇日本天皇詔旨，始我遠皇祖之世以百濟国為内官家云云。(大化元年百濟使への詔)

「御宇」とは、そのような対外的意識を持つという認識が文武朝には確立したわけです。その文武朝にその言葉を使った標目を建てて“万葉集”を編んでいるわけです。単に「某天皇代」とはせず、日本国内の統治を意味する「御大八州某天皇代」でもなく、全世界の統治を意味する「あめのしたしらしめす」とし、それも「某治天下天皇代」ではなく「某御宇天皇代」と表記した編者の心を見逃してよいのでしょうか。編者の眼は世界に向けられているのです。

そのような観点でみると，“万葉集”の巻頭歌も従来の諸見解とは別の見方が生まれてきます。なぜ舒明以後持統に至る6代65年に先立って、150年前の雄略歌を置くのでしょうか。実質的にはどうして舒明から始めるのでしょうか。ある研究者はこう説明します。『古事記』をみると、その下巻は人の世つまり近つ世の話である。その近つ世を代表し象徴する君主が雄略である。それ故に巻頭に置いたのだと。それならばなぜ『古事記』の下巻つまり近つ世の冒頭に位置する仁徳を巻頭に据えなかったのでしょうか。仁徳も雄略同様に、恵あり歌ありの帝王で、しかも近つ世の初代です。その仁徳を捨てて雄略を取った理由を考えねばならないでしょう。雄略でなければならぬ理由、しかも次の舒明との関連でそれはなされなければならないでしょう。

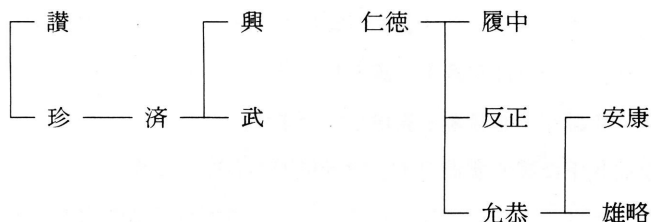
私はそれを、日中外交の面から考えています。唐王朝までの外交は3期にわけられます。

古代外交……………3世紀の卑弥呼の時代（後漢書・三国志・晋書・梁書・北史・冊府元龜・古今図書集成）

近代外交……………5世紀の倭の五王の時代（晋書・宋書・南史・梁書・南齊書・冊府元龜・古今図書集成）

現代外交………舒明朝 630年の第一次遣唐使派遣（日本書紀・旧唐書・新唐書）

現代外交は遣唐使の時代ですが、その第一次の派遣が舒明2年(630)でした。それより200年前の近代外交は倭の五王の時代です。宋の武帝の永初2年(421)に朝貢した倭王讚以下、珍・濟・興・武を記紀のどの天皇に比定するか、諸説異なりはありますが、武を雄略に当ることは一致しています。比定の例を挙げておきましょう。



近代外交に登場する五王の中で、武が著しく傑出していることが重要なのです。当時日本は中国の政治の傘の下に在り、天皇は中国皇帝から官爵を与えられました。その官爵の与えられ方が武の場合他の四王と異なるのです。

- 1) 五王とも安東大將軍を希望したが、最初から大將軍に任ぜられたのは武だけである。濟は後に任ぜられたが、他の三王は安東將軍どまりであった。
- 2) 武はその後他の四王が任ぜられなかった鎮東大將軍、征東將軍、征東大將軍にまで至っている。
- 3) 使持節、都督の爵号を与えられたのは武と濟だけである。

などです。武が昇明2年(478)に宋の順帝に送った上表文が『宋書』に記載されていることも注目に値します。中国史書に外交文書の記載されている例は、後にも先にもありません。武つまり雄略はこういう人でした。

雄略は近代外交の中心的人物、舒明は現代外交の開拓者、そのような人物を“万葉集”は巻頭に置いたのです。

当時の外交政策をみると、天智8年(669)第六次遣唐使派遣後、天武・持統の二朝間約30年は派遣をしていません。天智2年(663)の白村江での敗戦により外交軍事政策を全く失った日本は、天武・持統の間は受身の外交に徹し、国

外情勢をにらみつつ国内体制の整備に力を尽くします。そして文武朝の大宝元年に律令制定、翌年第七次遣唐使を派遣し、積極外交に転じます。第七次の時は正使の上に執節使を置き、その執節使には律令制定に参画した粟田朝臣真人を任じたということは、第七次の使命が何であったかを語っています。国内体制の充実から積極外交へ、このような対外意識の充満しているのがこの頃でした。

その対外意識とは何でしょうか。5世紀の近代外交と8世紀の現代外交との大きな違いは、中国皇帝を主権者とする冊封体制下に日本が組み込まれているか否かにあります。倭の五王は主権者から官爵を与えられ、冊封下に組み込まれています。8世紀の天皇は官爵を申請しなければ与えられもしていない。律令の注釈書は、新羅などを諸蕃と表現しています。これは天皇が主権者となり、新羅などを冊封下に置く意識です。中国皇帝が君臨して東アジアを統治する冊封体制の、いわばミニチュア版として、天皇が君臨して国外諸蕃の新羅・渤海などの朝貢の上にたつ律令国家として、国際的地位を主張しようとする意識です。

このような東アジアの国際状況下にあつて“万葉集”は成立したのです。巻頭には積極外交を展開し、その名の外国においても高い雄略・舒明を置き、内容は律令国家統治者である天皇讃歌、成立は律令制定直後。その律令には始めて外交文書の書式を定めるほどの外交意識があるのですが、その書式の用語「御宇」を用いて標目を表現した“万葉集”。この成立をただ文学の世界にのみ封じ込めておいてよいのでしょうか。律令国家を讃え、諸蕃を冊封体制下に置き、大唐を意識しつつ、東アジアにおける国際的立場を主張する文学的営みが“万葉集”の成立であつたと考えられないでしょうか。

このように考えてみると、“万葉集”の編を計画した人は、日中外交を中心とする東アジアの国際状況に精通した国際派の人たちただだろつと思ひます。しかも律令にも詳しい人です。私は律令制定に参画し、自ら第七次の執節使として渡唐し、慶雲元年に帰国した粟田朝臣真人と、遣唐少録として同行した山上憶良を挙げたいと思ひます。律令国家の成立により、唐王朝との対等外交ルートを開くため渡唐した真人たちは、文学の面におけるあまりにも大きな落差

を感じたに違いありません。時に唐は初唐の文学隆盛を誇る則天武後の時代です。真人たちを迎えた唐王朝の宰相は、蘇味道・李嶠など詩人宰相たちでした。真人たちの前にはいったいどれほど多くの詩文集があったことでしょうか。中国の史書は真人をこう書いています。

真人好読経史。解属文。容止温雅。則天宴于麟德殿。授司膳卿。放還本国。
(旧唐書)

文武天皇。大宝3年当長安元年。遣粟田真人入唐求書籍。(宋史)

正倉院蔵『王勃詩序』には、慶雲4年7月26日書写の日付がありますが、書写原本の『王勃集』30巻は、武后時代に唐土で書写され、真人たちによって日本に持ち込まれたと考えられています。このような文学センスのある真人と詩歌に通じた憶良、彼らが日本の歌のアンソロジーを考えることも自然なことではなかったでしょうか。

このように考えてくると、このような歌集が無名であったとは考えられないでしょう。文武朝にまとまった成書の成立を認める従来の研究も、「万葉」という書名だけは、後年橘諸兄あるいは大伴家持、更に時代を下げて平安時代の平城天皇の命名などとしています。私のようにこの成書を独立した人格 — 書物なら書格でしょうか — とは認めず、以後成長のための第一段階の群に過ぎないと考えているのです。ですから、第一次撰本とか、原撰本だとか名付けるのです。第一次撰とか原撰というのは、第二次撰、本撰を予想した言葉ですからね。そうだとすると本撰でこそ命名されるべきで、原撰などに名のあるはずがないと考える。ですから、命名は後年と考えるのです。私はその成書はそれなりに独立したものと考えます。ましてや、今まで話してきましたような事情での成立なら、それが無名であることがおかしいわけですね。文武朝成立時に「万葉集」と名付けられたと考えるのです。

今までの万葉学では全く考えられていない話をしました。御教示下されれば幸いです。